様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：33912
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23820063
研究課題名（和文）中世イロハ引き日本語辞書の漢字字体認識及び注記構造に関する研究

研究課題名（英文）A study of kanji style recognition and explanatory note structure in a Japanese dictionary in the Middle Ages

研究代表者
村井　宏栄（MURAI HIROE）
名古屋学院大学・商学部・講師
研究者番号 40610770

研究成果の概要（和文）：
本研究では、中世日本語辞書を対象とし、字体認識及び注記構造の解明を目指した。結果、『色葉字類抄』では、多くの部首分類体字書や音義書とは異なり、「作」注記が字体注記と見なしがたい例がまま見られ、「又作」と「亦作」によって用法の相違が認められること、また「亦作」の所在の偏りから編纂過程を考慮に入れる必要性を指摘した。『下学集』では「作」注記の主目的が異表記表示に移行しており、異体字注記形式は「作」から「同字」へと移行してゆき、逆に「作」注記は異表記表示に特化していくという仮説を提示した。

研究成果の概要（英文）：
In this research project, I aimed at clarification of kanji style recognition and structure annotation. As a result, I obtained two major outcomes;1)During the *Heian* Period, many character dictionaries classifying their entries by radical as well as glossaries giving the Sino-Japanese on reading for characters together with their meaning were compiled. Unlike most of these the annotations employing the character *saku(作)* in the three-volume edition of the *Iroha Jiruisho* are not considered to be simply an annotation of character variants (*itaiji*).*亦作* appears only to the volume in the under in the two-volume edition. This means that the distribution of *亦作* throughout this text is linked to the process by which this text of the *Iroha Jiruisho* was revised. ;2)In the *Kagakushu*, The main purpose of the annotations using *saku(作)* has shifted to indicate different graphic representations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：「作」注記、「又作」、「亦作」、異体字、異表記、異字体、イロハ引き辞書

１．研究開始当初の背景

３．研究の方法

上代、漢字・漢文の流入と定着によって万葉仮名が生じ、中古の二つの仮名体系成立に結びついていったことから、日本語書記史は複雑化していく。同時期に漢文体、宣命体、平仮名文、いわゆる片仮名文・漢字片仮名交じり文等、種々の表記体が併存する関係となったからである。このうち、院政期から室町時代に至る日本中世は、日本語の書記体裁が最も多様性に富む時代であったと言える。本研究は中世イロハ引き辞書を対象とし、12～15世紀の漢字字体・字体用字注記の実態調査とともに辞書構造の解明を目的とする。辞書はその存在自体が書記のためという命題を有しているという意味で際だった存在であり、本研究が書記史研究の一班として古辞書を取り上げる理由がここに存する。

２．研究の目的

日本古辞書を対象とする漢字字体および字体意識の研究について、従来の研究においても多くの蓄積は存在している。しかしそれらの多くは仏典・漢籍からの本文受容の影響が大きい部首引き漢字字書・音義書や近世辞書を対象とするものであり、中世イロハ引き辞書を中心対象に据えた基盤的な字体研究はほとんど見られていない。歴史言語学的漢字字体研究における不備と言え、本研究課題はそれを補う意図を持つ。亀井孝他（『日本語の歴史３』平凡社、1964）が言うように、日本語辞書史において、真の意味で主体的な書記のための辞書は院政期成立の『色葉字類抄』に始まると言ってよい。イロハ引き辞書の成立は、日本語音節の側から辞書記述に辿り着くことが可能になったという意味において、従前の辞書とは異なる新境地を切り拓いたからである。

不破浩子「異体字研究史考―正字の学の和と漢と―」（『長崎大学教養部紀要　人文科学篇』38-1、1997）や鈴木一男「上代人の正字意識について―付萬葉集か万葉集か―」（『国語と国文学』45-11、1968）が指摘するように、中古までの日本の文献資料では、必ずしも中国サイドの字体規範意識に拘泥しない姿勢が認められ、ゆえに日本独自の漢字字体意識を掘り下げる必要性が存する。

以上のような状況を踏まえ、本研究では、規範の表れやすい辞書をモデルとし、中世イロハ引き日本語辞書を対象として字体認識を明らかにするとともに、それに伴う注記構造の解明を目指した。ワード・プロセッサーによって各人が同一字形を実現しうる現代とは異なり、規範の実態が不明である日本中世にあって字体認識はいかに求められ、辞書構造はいかなる変容を見せるのか、解明が求められていると言える。

（１）「作」注記への注目

ただし当該期の辞書資料においても、字体認識や字体の個別的特徴は各資料ごとに様相が異なることが予想され、まずは各資料内部において漢字の字体・用字意識を探ることが必要となる。そこで本研究課題においては『色葉字類抄』・『下学集』・易林本『節用集』など、イロハ引き辞書の系譜において字体・用字注記として共通して広く用いられる「作」注記に注目し、各資料においてこれらがどのように用いられているのか調査するという方法を採った。注記に注目する理由は、注記自体が見出し字に対する注意指示という積極的意図を伴うものであり、字体認識が顕在化しやすいにもかかわらず、構造や用法含め、未解明の部分が大きいと考えたからである。

（２）用例採集及び整理

（１）の視点をもとに、『色葉字類抄』・『下学集』・易林本『節用集』における「作」・「同」・「同字」注記等の諸形式を用例採集し、各本内部における被注字（見出し字）・仮名語形注記・注記形式・声点や字音注記の有無・所在等必要データをエクセル入力した。また、必要に応じてスキャナで画像取り込みをし、字体を相互参照できるよう、用例を整理した。その際、先行研究の成果を参照しつつ、従来の研究では不十分な個別用例の精査を実践した。

（３）異本の参照及び相互比較

多くの場合、辞書資料は孤立した単一の伝本のみで存在するのではなく、過去の異本からの継承によっても影響を受けている。例えば三巻本『色葉字類抄』には同系と見られる『節用文字』・二巻本及び七巻本『世俗字類抄』・二巻本『色葉字類抄』等が存しており、系統関係は必ずしも明瞭ではないものの、登載語には共通する部分が大きい。これらを相互参照することによって当該本の「作」注記、ひいては同字認識・用字認識をより精確に定位することができる。本研究においては、各諸本における用例数の多寡、当該諸本の注記形式の相違、見出し字・注記字の交替等のデータについても（２）と同様に採集及び相互参照を行い、個別事例を検討した。

（４）『大漢和辞典』・異体字辞典類の参照及び字体構成要素からの分析

（２）（３）で得た用例について、その注記形式の機能差の有無を探るため、『大漢和辞典』（大修館書店）及び異体字辞典類を用いて被注見出し字と注記字との関連性を調査した。具体的には、両字に関連性が認められるものを「関連字」、認められないものを「非関連字」とし、傾向を探った。「関連字」という基準を

導入するのは、三巻本の背景にある文字認識が不明であり、いわゆる異体字の判定に恣意的には踏み込めない以上、何らかの客観的な基準によって判定したいという目的のためである。この観点により、三巻本『色葉字類抄』においては「又作」で注記された被注見出し字と注記字との関係は関連字・非関連字の両者が見られるが、「亦作」のそれは非関連字の関係性が見出されないという結論に至った。この結論を補足するため、被注見出し字と注記字の字体構成要素の共通性の観点からも検討を加えた。

４．研究成果

如上の方針と調査に基づき得た知見を研究成果に基づいてまとめると、次のとおりである。

（１）研究発表②では、三巻本『色葉字類抄』における「作」注記の概要を述べ、「又作」と「亦作」の差異について以下3点を指摘した。まず第一に、各注記形式の重出例や交替例により、「又作」「亦作」は正―俗等の評価を含意しない異体・異表記注記であると考えられる。第二に、三巻本の「亦作」はほぼウ篇以降のみに出現し、これは二巻本でいう下巻部分に限定される。よって、「亦作」の分布の背景には『色葉字類抄』の改編過程が関与すると考えられ、諸本系統関係の側からも検討していくことが必要と言える。第三に、『大漢和辞典』他との照合及び見出し字・注記字の構成要素から検討した結果、「亦作」の主たる機能は異字体（異形同字）を示すことにあるのに対し、「又作」のそれは異字体を包含した異表記を表示するものと言える。すなわち、ある漢字二字の関係について関連性を認める場合、①同字体―②（字の同定という意味における）同字種―③同語という三段階を設定することができ、その場合、三巻本の「又作」注記が示しているのは②ではなく、②を包含した③同語異表記の段階と考えられるのである。「又作」と「亦作」とでは、次元の指示内容が「作」注記によって共通して用いられていると指摘できる。口頭発表後に得た知見と用例の再確認を行い、論理の精緻化を経て、査読付き学会誌に論文を公表した（雑誌論文②）。

（２）上記のように三巻本『色葉字類抄』の「作」注記は一種の用字注記と規定できるのとは異なり、平安期成立の部首分類体字書や音義書では「作」注記が多く字体注記として機能し、それは基本的に字種の同定の下に用いられる。このことの要因として、本研究ではイロハ引き辞書の体裁と諸本間の見出し字/注記字の交替現象という点から考察を加えた。

三巻本『色葉字類抄』と二巻本『色葉字類抄』における「作」注記を比較すると、三巻本441例に対して二巻本における「作」注記は38例（「又作」14、「亦作」4、「作」12、「俗作」5、「或作」3）が計上され、用例数には大きな開きが認められる。すなわち、三巻本『色葉字類抄』の「作」注記が示す注記字は、異本である二巻本ではその多くが見出し字として掲出しており（両本に当該字が収録されているものに限定すると80%以上）、三巻本は二巻本の見出し字を別の見出し字注文内に「作」注記として収めることで多くが成立していると言える。

三巻本の注記表示法は、どの見出し字に対する注記なのかを明示し、より構造的に掲出グループを標示することができる。かつ注記の種類を見誤らせることがない。また注文内に収めることによって異なる字体・用字を追記する余地が生じ、総合的に見て利便性が高いと言える。見出し語間に適宜余白を置く紙面構成法とともに、「作」注記が三巻本において圧倒的に増加する如上の要因が認められる。

この点からわかるように、辞書内部の注記情報は、辞書の紙面構成法や見出し語の掲出方法等という環境的条件を考慮に入れた上で考察していかなければ、辞書記述の意味するところを見落とす危険性が存する。本研究は、このような観点に立った上で研究を遂行しており、より辞書構造についてのより立体的な視点を切り拓いていると言える。

イロハ引き辞書は通常、仮名語形をもとに該当する漢字表記を類聚して掲出グループを構成・配列していく。したがって、仮名語形が掲出グループの指標となっており、見出し字たる漢字表記相互の字種の同定はさほど問題とされない。見出し字が改編過程において注記化されている現象を認めるとするならば、イロハ引き辞書においては、そもそも構造的に注記として注記として同語異表記が入り込みやすいと言える。すなわち、字種の同定をもとに部首から各字の辞書記述に到達する部首分類体字書とは異なり、仮名語形から漢字表記に到達する体裁であるがゆえ、三巻本の「作」注記は字の同定に拘泥せず、用字注記の側面を持ちえたと結論付けられる。

（３）易林本『節用集』における「作」注記について、乾善彦（『漢字による日本語書記の史的研究』、塙書房、2003）は、基本的に「通用する表記ないしは用字に関する注」としており、「同」字注が「異体字あるいは通用字」を示すのとは対照的である。これら先行研究と（１）（２）で得た成果により、イロハ引き日本語辞書史における異体字・異表記の注記形式の系譜という課題を再設定を試み、異体字注記形式は「作」から「同字」へと移行し、逆に「作」注記は異表記表示に特化してゆくのではないかという仮説を立てた。

第一段階　音義書や部首引き字書
　→異体字
第二段階　三巻本『色葉字類抄』
　→異体字を主とし、若干の異表記を含む
第三段階　易林本『節用集』
　→異表記（ただし若干の異体字を含む）

〔学会発表〕（計2件）

これを検証する意味で、『色葉字類抄』と古本『節用集』をつなぐ存在として『下学集』の注記形式とその実態とを調査した（研究発表①）。『下学集』において異体字・異表記への注記は、「同字」（含「同」）と「作」とが中心的である。見出し字・注記字間の関係性について、前者には基本的に異体関係が認められるのに対し、萩原義雄「作語攷－室町時代古辞書『下学集』を中心に－」（『駒沢大学北海道教養部研究紀要』34、1999）が言うように、後者には基本的には同語異表記関係を認めてよい。このことは、「作」で括られた両者について、①仮名語形に熟字訓的な面が認められる、②見出しと注記字について、漢字文字数が異なる、③見出しと注記について、仮名語形が異なる、のような現象からも支えられる。すなわち、「作」注記の表示は同音異表記・同語異表記であることを軸としながら、異形態の同義語であることもまでをも広く含むと言える。また、中には、一部広義の異体関係と見なせるものも含まれているが、それは異体字定義の二面性に拠ると思われる。概言すると、『下学集』における「作」注記の主用法は、既に異表記の側へと移行している可能性が高く、『色葉字類抄』における用法からは変容を見せていると言える。乾（2003）が言うように、易林本の「作」注記についても、異体関係を指示するものが一部認められるが、これは『下学集』からの継承の可能性が認められる。上記の仮説を再検証していくためには、今後、『下学集』からの継承ではない『節用集』の独自情報を採取する必要性が浮上した。

（４）本研究の取り組みは、字形・字体の異なりをどう認識していたかという視点において規範性と実態をあぶり出すこととなり、それは単に辞書資料の範囲内のみに留まらず、歴史史料・文学作品の読解等においても援用可能である。この点から、表記体の異なる『源平盛衰記』各種伝本の字体の異なりについて用例を採集し、全釈として注解に活かした論文を公表した（雑誌論文①）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①早川厚一・曽我良成・村井宏栄・志立正知・橋本正俊、『源平盛衰記』全釈（八―巻三―１）、名古屋学院大学論集人文・自然科学篇、査読無、第49巻第2号、（2013）、pp1-88(右)

②村井宏栄、三巻本『色葉字類抄』における「作」注記について、日本語の研究、査読有、第8巻4号、（2012）、pp1-15

①村井宏栄、『下学集』における異体字・異表記の表示、名古屋言語研究会第100回記念大会、2012年4月28日、名古屋大学（愛知県）

②村井宏栄、三巻本『色葉字類抄』における「作」注記について、日本語学会2011年度春季大会研究発表会、2011年5月29日、神戸大学（兵庫県）

６．研究組織
(1)研究代表者
村井　宏栄（MURAI HIROE）
名古屋学院大学・商学部・講師
研究者番号：40610770